

日中韓フォーサイト事業

中間評価（平成31（2019）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 大阪大学(教授・青井孝)

研究交流課題名 核子から核物質にいたる量子多体系の織りなす極限条件下の多彩な核構造

評価結果（総合的評価）	
S	想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
A	想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
O	B ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
C	成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。
所見	
本研究交流事業は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、各国の加速器施設へ赴いた実験の実施が実質上不可能となったことで、本格的な国際共同実験が困難となり、当初の計画は達成されていない。そのような中ではあるが、検出器に関する共同研究は比較的進展しており、極限状態下の原子核の特異な構造の解明を目指して、中韓の高分解能ガンマ線検出器を日本に持ち込み、日本の加速器施設でガンマ線分光研究を行ったことは評価できる。中韓のゲルマニウム検出器を用いた理化学研究所でのHiCARI実験キャンペーン、原研タンデムでのEs標的実験の結果を成果として出版することが早急に求められる。一方、参加研究者のバランスが日本に偏っており、中国・韓国での研究推進にどの程度寄与できるか疑問が残る。 若手研究者育成の面では、オンラインでのサマースクールの開催が参加者数を増やす効果をもたらしており、今後の交流相手国との研究ネットワークの構築が期待される。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大状況下でも学生やPDの派遣や受け入れは可能であったと考えられ、たとえば定期的なオンライン講義シリーズの開催など、より一層の努力が求められる。 韓国との往来時の隔離措置が撤廃され、中国とも往来時の隔離措置の状況を見ながら交流を再開させる計画が示されており、今後の国際研究交流の成果が期待されるが、コロナ禍が改善しなかった場合のことも想定した共同研究計画の立案が望まれる。本プロジェクト独自の工夫を凝らした研究交流プログラムの実施を期待したい。	